修士（2021 年度）

現代スピリチュアリティにとっての「真理」と「新自由主義的統治性」
――当事者へのインタビュー調査から――

栗栖　瑞季

1. はじめに

現代日本社会において、「スピリチュアル」や「精神世界」という言葉を、多くの人が知っているのではないだろうか。宗教社会学では、そうしたものを「スピリチュアリティ（spirituality）」をめぐる現象と呼ぶ。スピリチュアリティとは、宗教学者の堀江宗正によると「(1) 通常は知覚しえないが内面的に感じられるものへの信念と、(2) それを体験して変化をもたらそうとする実践の総体であり、(3) 宗教文化的資源の選択的摂取、(4) 個人主義や反権威主義といった態度が、程度の差はあれ、ともなうもの」だと考えられる（堀江 2019: 16）。より具体的な例としては、「引き寄せの法則」や「チャネリング」、「霊視」、「占い」などを通した信念や実践があげられる。

こうした現代スピリチュアリティは、先行研究において新自由主義と親和性があると論じられてきた。Carret & King は、伝統的な「宗教」は連帯的な価値観をもっていたが、市場原理が浸透したことによって、個人主義的なスピリチュアリティに乗っ取られたと主張する（Carret & King 2005: 170）。このような先行研究では、現代スピリチュアリティには新自由主義的なイデオロギーが内在しており、その当事者はそれを受け入れることによって、その構造を再生産するのだと考えられている。しかし、苦難を自己の責任とし、個々人に努力を求める様相を新自由主義だけに還元することはできないのではないか。

そこで、本論文では、現代スピリチュアリティにおいて「真理」とされるものと新自由主義との関わりを、ミシェル・フーコーの「統治性（gouvernementalité）」概念をもとに検討することとする。

2．ミシェル・フーコーによる「統治性」と「真理」

フーコーは、その著作の初期から「真理」の問題を論じてきた。本論文では、「統治」、すなわち振る舞いの導きの指標としての「真理」に注目する。フーコーによると、「真理」は振る舞いの様式を生産するものであり、それを通すことで自己や他者を「統治」する（振る舞いを導く）ことが可能になるという（Foucault 1974=2006: 14-15）。それに基づくと、現代スピリチュアリティの「真理」は当事者の振る舞いの規準となるもので、これを媒介することによって自己と他者の振る舞いを導く可能性があると言える。

先行研究において、現代スピリチュアリティの「真理」に自己責任論を称揚する言説が見られることが先行研究において指摘されてきたが、新自由主義の統治による導きがそこにあらわれていると考えられる。新自由主義の社会では市場の利益を増大させることが優先され、規制緩和、緊縮財政、福祉や社会保障の縮小などが行われ、自助努力によって自分や家族をケアし、問題に対処することが要求される。Carret & King のような先行研究によれば、新自由主義の統治が拡大したことによって、統治の主体が現代スピリチュアリテ

ィの「真理」にもその振る舞いを導いていることになる。はたして、スピリチュアリティ当事者は、現代スピリチュアリティの「真理」を用いることによって、「新自由主義的統治」にからめとられていくのだろうか。

３．スピリチュアリティ当事者へのインタビュー調査

本研究では、2020 年 11 月から 2021 年 6 月にかけて 12 名のスピリチュアリティ当事者にインタビュー調査を実施した。調査結果は、(1) 現代スピリチュアリティに接触するきっかけ、(2)「真理」を通して他者に伝えたいこと、(3) ケアの場としてのスピリチュアリティ、という 3 つの項目に分類し、分析を行った。

(1) 現代スピリチュアリティを深く探求するようになるには、神秘的な体験や、スピリチュアリティが生み出す「真理」に納得するといった経験を経ていたことがわかった。現代の科学が扱う領域を超越した体験や世界の構造を説明するものとして、神秘的で「スピリチュアル」な「真理」が見出されるのだ。

(2) 自分の意思で物事を決定し、それに責任を持って努力することが現代スピリチュアリティの「真理」を通して伝えられていた。スピリチュアリティ当事者たちは、自身が直面する問題が社会や環境によるものだったとしても、自分の問題として取り組もうとしなければ現在の状況が変わらないことを、自身の経験として知っているのだ。

(3) 現代スピリチュアリティは、大切な人を失った人、災害に見舞われた人、病気を患った人、理不尽な目にあっている人、家族のなかで問題を抱える人など、それぞれの苦悩や悲嘆を癒そうとする場でもある。自分の力で解決できるかもしれない問題として扱うことで、当事者が取り組むことができる場所となっているのだ。

４．おわりに

スピリチュアリティ当事者は、現代スピリチュアリティの「真理」を用いることによって、「新自由主義的統治」にからめとられていくのだろうか。(2)、(3) では、新自由主義的な統治を背景として当事者が現代スピリチュアリティに接触し、その「真理」によって自己と他者を統治していることがわかる。しかし、(1) において現代スピリチュアリティの「真理」には「新自由主義的統治」の導きには還元することのできないものがあった。それは、「スピリチュアル」な存在や世界への信仰だ。現代スピリチュアリティにとっての「真理」は「新自由主義的統治性」と結びつきつつも、現代社会において軽視されやすい神秘的な事象と人間との関わりを探求することができるものなのだ。

参考文献

Carrette, Jeremy and Richard King, 2005, Selling Spirituality: The Silent Takeover of Religion, London: Routledge.

堀江宗正,2019,『ポップ・スピリチュアリティ　メディア化された宗教性』岩波書店.

Foucault, Michel, 1974, “La verité et les formes juridiques”,in Dits et écrits tome Ⅱ 1970-1975, Paris: Gallimard.（西谷修訳,2006,「真理と裁判形態」小林康夫・石田秀敬・松浦寿輝編『フーコー・コレクション 6：生政治・統治』ちくま学芸文庫.）